

テーブルの雲

A Book for a Rainy Day / Nozomu Hayashi

林 望

新潮社



テーブルの雲

A Book for a Rainy Day. Nozomu Hayashi

林 望

新潮社



テーブルの雲^{くも}

はやし のぞむ
林 望

発行——1993年9月10日

3刷——1993年10月10日

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

〒162／東京都新宿区矢来町71／振替 東京4-808

電話——営業部 03・3266・5111

編集部 03・3266・5411

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Nozomu Hayashi 1993, Printed in Japan

ISBN4-10-393901-X C0095

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

テ
ー
ブ
ル
の
雲
＊
目
次

甘

テーブルの雲 10

十万円のマグロ 14

アンコ之美 19

消えたお菓子たち 24

ピッツアとコーク 26

二本の柿の木 30

イギリス的休暇 32

山河へ 35

一つの幸福 37

翻訳の不可能なる 40

サトウのもう一つの顔 47

チューブの風 52

酸

車窓の冷凍蜜柑 56

風景を見る目 58

池の幻影 65

蠟燭文書の夢 67

父の腕時計 69

「じつに、くだらない……」 73

運命の力 77

洋行先生緑陰清談 81

マタタビ採り 89

『青猫』の頃 91

父の激励 95

しびれる 97

巖

平目を討つ 102

醬油の民 104

酒の品ということ 108

ホーロー讃 113

おこめ 116

いちご煮 121

風土と好尚 123

志を述ぶるということ——『澠江抽齋』を読んだ頃—— 125

不才なる人は…… 127

徳良先生 130

信彦先生 134

苦

祖父の遺戒 140

タイヤは日に干して……

142

街角のモダニズム 146

珍景論 151

見果てぬ夢 156

人体の不思議 159

裸体主義の伝統 161

国語嫌いの少年 165

春の心変わり 168

恐るべき学園祭 170

ゴールは遠く 175

読む方法について 182

辛

本を作る

189

甘党

192

蕎麦の食べ方

194

天才にして奇人

196

イギリス人の夢

200

やせ我慢の理由

208

独立のシンボル

215

米、がんばれ

220

「おもてなし」の深層

223

給食の個人主義 232

不可思議なる職業 245

母国語の問題 250

買える図書館 255

何が読みたいか？ 257

マスク 259

祖母の発明 263

私の御先祖主義 265

雨の日に――あとがきにかえて――

装画 * 矢吹 申彦
装帧 * 新潮社装帧室

テーブルの雲

テーブルの雲

我らの卓子てんぷるのうへに

ひとむらの雲がある

その雲は慾情である

その雲は憂愁である

その雲はまた追憶である

雲はいつも我らの悲しい情熱を見下ろして

はろはろと雨を降らせるであらう

我らの卓子が

いつも濡れてゐるのはこの理由^{わけ}である

その雨は悔恨である

その雨は夢想である

その雨はまたすべての時間を巡歴して

ふたたび蒼穹へ差しのぼつて行くであらう

雨はいつも我らの蒼白な希望を蒸発して

うらうらと天上するであらう

我らの卓子のうへには

この故にいつも雲が覆つてゐるのである

甘

あまい

十萬円のマグロ

何事にも「センス・オブ・プロポーション」ということが大切である。すなわち「比率感覚」
とでも言おうか。

たとえば、着るものについて考えてみる。

「着こなす」ということは、いったいどういうことだろうか。それはこういうことだと私は理解
する。

私が大学時代にお教えを頂いた、今は亡き森武之助先生は、もともと非常に裕福な家の御曹司
で、若い頃からお金に不自由したことは少しもない方だった。鎌倉の広大な西洋館に悠々と住み、
いつも一見して英国製の生地と分る仕立ての良いスーツを着ておられた。なにしろ資産家で、大
学の給料などは先生にとってはほんの小遣い程度のものであったらしい。

もう十五年以上も前になる。ある日、先生は新しい背広をあつらえたという話をされたことが
ある。

「昨日、英國屋で背広をこしらえたが、このごろはずいぶん高くなったね」